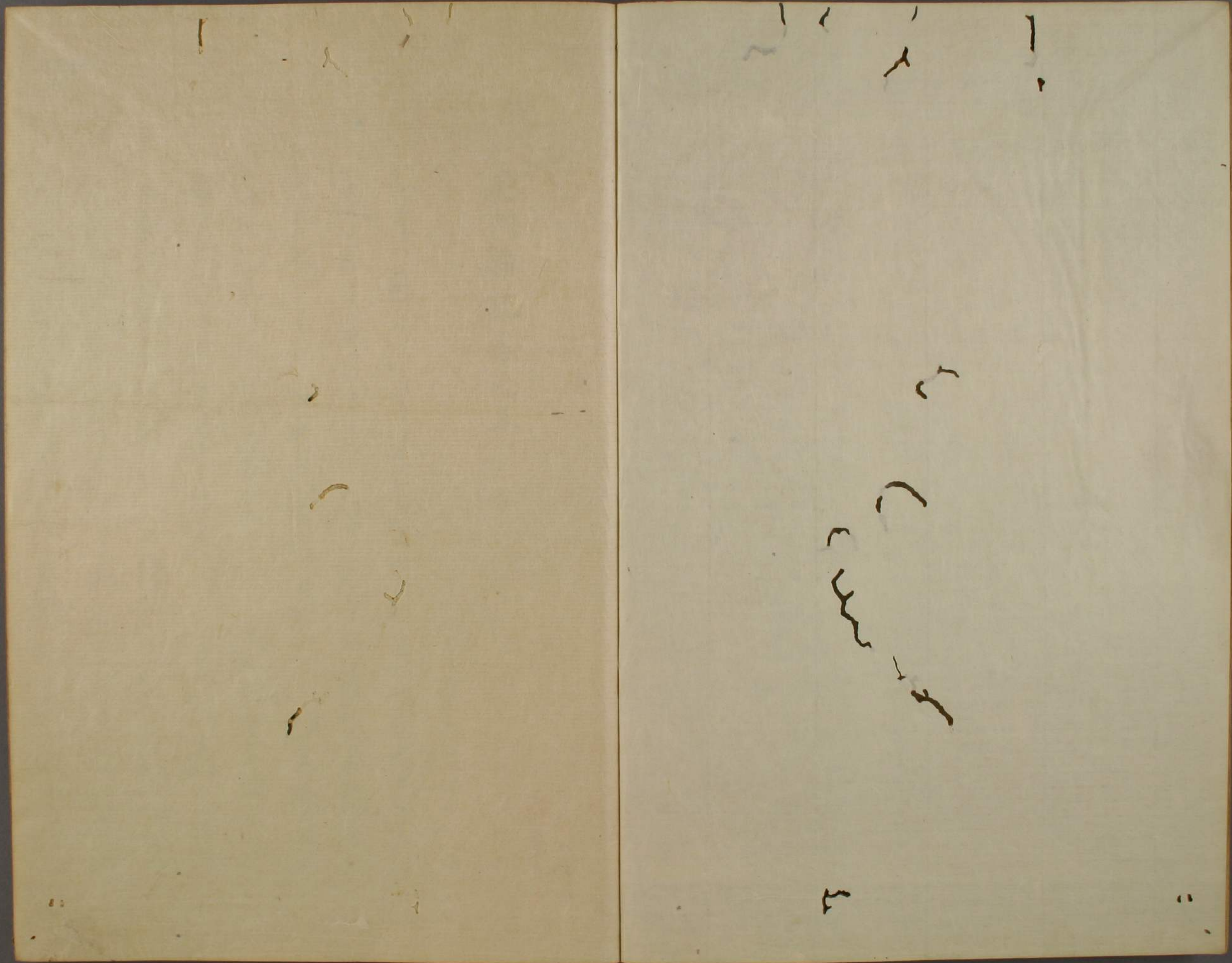


退閑雜記

卷ノ五

特別
5194
5





門 10
號 5194
卷 5



閑雜記卷之五

ふりいあふといりまききわひふれあふれい
きこぬる存し思ふれりり石層のぬ海山あ
たふぬるもあふりれもみかくけり合巻の
ふくひい何の減りあるべき人あわてふき
服せしし人あわてふれしきもれしあふ
らぬ山重ふりあぬりぬせこれいふと
しぬれいりり減りあふりあふり
いそらりりれしきい虚辭と改てん

昭和三十年
一月十八日
購

つむぎも嫡庶廢之のりふ存とも進ひと生
してつるふ于ておむすふくこれるはのんこれ
うこふ甲冑も城比ふより居るのりくみれ
奇り音も鼓も樂ともいそふとあはれとこ
ちりもあはれ

神社の神聖神武のゆ徳よりくやゆ代ふく
久しく四の海ふくみより藩翰の職よりしそ
末の兵もその職くむとあはれとこはえま
るゆけあはれとこきし律代のふりしそふ考く
まのりしそふとここのそふも筆もあはれしぬ

うきしそふとこ堯舜のほ代三代の治ともふ
このおやあはれとこたのふとぬとあはれとこ
代の治は此おふもあはれとこにらぬとあはれ
ゆけしそふとこあはれとこあはれとこあはれとこ
是父子君臣夫婦朋友のるも海のつゆなとこ
しそふとこあはれとこ天地も海のつゆとこ海の
きほむとこあはれとここのあはれとこあはれとこ
人より海のおふとこあはれとこあはれとこあはれとこ
あはれとこあはれとこあはれとこあはれとこあはれとこ
あはれとこあはれとこあはれとこあはれとこあはれとこ
あはれとこあはれとこあはれとこあはれとこあはれとこ

あつてつり智つりちりて何条のりあつてふ人
こころのりし経もあつてつりてこれいふつりよ
高橋ちりちり多き剛毅本訥仁あつてつりよ
り於仁も海の外あつてつりよかれ後玉のり
も西行のりつりのおりしつりよこれいふつり
つりよこれ海あつてつりよある玉海の感あつてつり
つりよつりよつりよ山枝末意あつてつりよの妙よ
場ふつりよあつてつりよの海つり天地もつりつり
あつてつりよあつてつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ

あつて女もあつて又老翁もあつてあつてあつて
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ

智囊曰東漢宗均常言吏能弘厚誰貧汚放縱
猶無所害唯苛察之人身雖廉而巧黠刻毒加
百姓識者以為確論いふつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ
つりよつりよつりよつりよつりよつりよつりよ

断つあまのこころも

又曰楚在王夜燕群臣出美人勸酒燭為風所滅
有一人牽美人衣美人曰有人牽妾衣已絕其纓
矣上曰飲人酒而沒以較之可乎遂命盡絕其纓會
後楚在王與晉戰一人直前犯難解楚圍救出楚王
王見其身帶重傷問之答曰臣乃蔣雄也昔日絕
纓會蒙上大王不殺之恩故來報答矣思不報也
人のつひもせと報つてあふ世をわらふものぞ
利を奪ととらふもあふ人よの海ふ感しと報
りれいも人ふほとらふものぞ人の口はれあふ

いさよもく人のいふぬもりうものぞ忠施し
てこれゆりひしとてさしわらうあきさるも似
たさうもささるもらさぬもささるもいづらん
とをゆゆもあつととあ人のあつととと
いあひわらうも報あつとと恩あつととあ
てれいあつととあもあつととあつとと報れ
とあつととあつとと子のあつととあつとと
何れあつととあつととあつととあつとと
あつととあつととあつととあつととあつとと
あつととあつととあつととあつととあつとと

者所云鄧思賢耳

又曰朱文公答鞏仲至曰用韻多所未曉古韻雖有此例然在今日却恐不無訛誤之嫌耳然林與典叶之是秦語以與為韻乃其方言終非音韻之正今蜀人語猶如此蓋多用鼻音也又題黃州屋楚辭悵韻謂傅景仁云漢書高惠功臣侯表符與昭韻西南夷西粵傳區與驕韻蓋本大招昭與遽同韻王岐公集銘詩中用遽字入招韻正出此耳蓋字之後處聲者嚶矇矇乎韻音皆為彊然則大招之遽當自彊而為喬乃得其讀也公又有楚

辭辨證上下卷此論尤多學者不可不知

溫度論一本有今板有之云云小異有劉吳公
考之序もふく又可の自叙あり徐遂先生
定稿李石臨初庸江徐天章古先生参考とあ
る板ののふく募原と多くいけりとの
うふく膜原とあり募の字ういふ如く
一劉氏の序も此の近鮮傳板や内重の校梓の
公之とありとのまのちうり

水東日記曰南海祠前波羅蜜樹其實大者至數
十斤癸未冬所收尤大者至三十斤者皮青味似茨

蘇肉甚厚以蜜漬之可調湯云

又曰宋時所刻書其匡廓中摺行上下不留黑牌首則刻工私記本版字數次書名次卷第數目其末則刻工姓名予所見當時印本書如此浦宗源郎中家有司馬公傳家集往々皆然又皆潔白厚紙所印乃知古於書藉不惟雕鏤不苟且摸印之不苟也

今人以大舒氣作聲為打呵欠韓昌黎詩噫欠為飄風註噫焉界切欠或作吹方言聚氣為噫張口為欠說文欠張口氣悟也宋蓋顛以亢聲大欠被初

曰本作噫歎蓋警神聲也見鄭氏禮注音於其切者非

又曰古人好尚多簡而實後世則繁而偽矣如碑刻一事之可見漢魏碑多不著書人姓名唐碑多書其人而亦多實歐虞顏柳李北海等碑是已今人詩文尚有偽為他人姓名者碑志中所題書篆人則例借名公顯人官銜姓名間雖有一二從實者亦不多見也近年胡祭酒文多求蔣廷暉書入刻東里詩文集序皆出程南雲隸書吳思庵懲鄉人偽作張宗海修撰之文之故晚年文字自書今印

行祥刑要覽序可考此意猶為近古若古若予前
 所記元人金臺集前後序跋之類悉出右人親筆則
 又加少也とあれ少くも序文と稱し目出
 たり筆工といふは端也一序のそのつ
 いては善者のよき一語にてもふくま
 生はれずぬ一語も縁とまんよと撰一語も
 この序やれんもつとありとて東江海鏡の
 かしめよとつとふかき一語も此の工
 拙もよとありたりか拙の端の端も久固新居と
 志し一語も一語もそのちみんとよきれりむ

ろく人ふをぬりハ禁一語もむらりの水
 よとせしむる一語も此の序東江海鏡の
 むとよとせられりぬとせり予もそとて
 ことつとせぬとたせしめども其のつと
 かしとせられりぬとせり予もそとて
 川一語も體裁もよき一語も此の序東江海鏡の
 他見を禁一語も入予もそのは大位もよき
 とつとせられりぬとせり予もそとて
 人つとせられりぬとせり予もそのは大位もよき
 ことつとせられりぬとせり予もそとて

兒回來孃家炒麻誰知來土人以為昔人有繼
 母偏愛己子者以生麻子授己子熟麻子授前
 妻之子嚼之曰植麻生者得歸家二子不知其
 謀中途幼子嗜食熟麻子遂彼此相易由是其
 己子誤植熟麻子得歸母思之至死化為此鳥
 呼其子云其他類此者多不可勝數要待好事
 者託事警世之意如所謂提葫蘆脫布袴之
 類耳かりやりの俗説あるやいかに親の族や
 こころのちをたまはれつゝの毛ごころごころ

並に

又曰白樂天画像一幅二像對立一則五十時容一
 則六旬後真也上有自贊別稱為蓬婆治南仙地
 地名仙地
 幅元末尚存北方人家

又曰張遂郎中持文山像求題上有少保兼太
 子大傅兵部尚書錢塘于謙贊且云于公坐側
 每懸置此像數十年一日也其辭曰嗚呼文山
 遭宋之季殉國忘身舍生取義氣吞寰宇誠

感天地陵谷變遷世殊事異坐卧小閣困于
羈繫正色直辭久而愈厲難欺者心可畏者
天寧正而斃弗為而全南向再拜含笑九原
孤忠大節萬古攸傳我瞻遺像清風凜然
又曰古今注以蝙蝠為仙鼠号蚊蚋為忝民羅
隱賦謂蜘蛛為秋蟲

又曰登州蓬萊縣納布老人言海市惟春三月
微吹東南風時為盛多見者城郭樓觀旗幟
人物皆具然變幻非一或大而為峯壑林木或
小而為一畜一物皆有之其色類水惟青綠色大

率風水氣旋而成西風北風無之故冬月則罕見
也蘇東坡有海市詩云誠沒の海より何部のの
とちありんばいかにいかに平なる海の中
をいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

又曰軍中探聽賊中動靜消息及專備急幹使
令人如宋時西邊所謂急脚急步者今湖湘謂
之健步西北二邊稍夜不收惟廣中則稍緝事
軍

花史曰宋時汴中謂雞冠花為洗手花中元

鄴前兒童盟賣以供祖先

又曰桂子之說起自唐時後宋慈雲式公月桂詩云天聖丁卯秋八月十五夜月有濃華雲無纖迹天降靈寔其繁如雨其大如豆其圓如珠其色白者黃者黑者殼如芡實味辛識者曰此月中桂子好事者播種林下一種即活り取勿へり

又曰種竹法以竹斫去本心苗二三寸填土硫黃在管內覆轉根及居上用土覆當年生笋

又曰瓶花之法牡丹花貯滾湯於小口瓶中插花一

二枝緊塞口則花葉俱榮一四日可玩芍藥同法一云以蜜作水挿牡丹不悴蜜亦不壞戎葵鳳仙花芙蓉花花親以上皆滾湯貯瓶挿下塞口則不憔悴可觀數日荷花採將亂髮纏縛折處仍泥封其竅先入瓶中至底後灌以水不令入竅中進水則易敗

又曰海棠花以薄荷色枝水養多有數日不謝

又曰擇水苦水尤忌以味特鹹未若多貯梅水為佳貯水法初入甕時以燒熟煤土一塊投之經年不壞不獨養花亦可烹茶

近侍のよへ後出のりや一やふふ山夜濫と
欽政あの新と一い其り一あささあふの
うんくくははさふ又いぬ一はさかとう後
いちとくくははさくう後一さ実う存
と信信其存とも其ふ一うい文字の四節うた
さういふういれより細濫る存とも無濫
多存ともあへ一あの人、漢筆、さるあれ何ふ
ても并、是、一その其り一あういさことうり
ううい一うく一う年月経れいさ一ああさ
い一あは後あ節一はさう一いもぬ一うぬ一

るりううわをり一あつう信信長さやうあさうぬ
うううたううえ一丁寧信信長さうい
あのみさういあも異り一あをわ一あういあ
とさうい一いさういさうい

花史曰以諸公詩詞觀之果見其所謂春菊夏菊
秋菊寒菊者也雖然此當以開于秋冬者為貴
開于夏者為次開于春者未必是真菊也

又曰菊之字案有五其體雖異而用則同鞠鞠
見說文鞠見尔雅鞠見礼鞠見韻今人多從簡用之
又曰鳳凰者漁陽人也常採百花水浸封泥埋之

百日煎為丸卒死者入口即活

又曰范文正公女孫病狂嘗閉一室窓外有大桃樹
一株花適盛開一夕斷檻登木食桃花幾盡自
是遂愈

又曰抱朴子劉生丹法用白菊汁蓮花汁和丹蒸
之服一年壽五百歲有人之母一不為藥の事
りえある所の芽をとり夏ハ冬ハあるを煮て
秋ハ冬をとり冬ハ春をとりて煮て之を
其れハ利氣血壯身延年の藥なりと予ハ後由
世ハ其氣凡ふくはくはくはくはくはくはくはく

又曰葦葉藤雲南出葉似葛蔓附於樹可為醬
即漢書所為葯醬也雙鸞菊花此花根可入藥
名曰烏頭

又曰瓶花忌以挿花之水入口凡挿花水有毒惟
梅花秋海棠二種毒甚須防嚴密

ある家のうきものありに薪多くつくと
赤鳥の毒を翁とててり此毒ハ火の川に
ふきとるなりおつふ川にふきとる
凍りの毒もさうありけりおとる毒も
火の毒ハ火の川にふきとるなり

人ありてこそこそはうらむのふり人くまを
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
てりうらむのちをひつふふりのちをけし
とありてこそこそはうらむのふり人くまを
とありてこそこそはうらむのふり人くまを
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
も鳥をとりてはうらむのちをひつふふりのちをけし
うらむのちをひつふふりのちをけし
はうらむのちをひつふふりのちをけし
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
も鳥をとりてはうらむのちをひつふふりのちをけし

疾のいほは後—
うらむのちをひつふふりのちをけし
はうらむのちをひつふふりのちをけし
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
も鳥をとりてはうらむのちをひつふふりのちをけし
うらむのちをひつふふりのちをけし
はうらむのちをひつふふりのちをけし
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
も鳥をとりてはうらむのちをひつふふりのちをけし
うらむのちをひつふふりのちをけし
はうらむのちをひつふふりのちをけし
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
も鳥をとりてはうらむのちをひつふふりのちをけし
うらむのちをひつふふりのちをけし
はうらむのちをひつふふりのちをけし
をを集りてはうらむのちをひつふふりのちをけし
も鳥をとりてはうらむのちをひつふふりのちをけし

多夢の人ありは紙をかくるふまゝくくく
のりこそ紙のむへまゝ紙をかくるふまゝくく
もくくくくくくくくくくくくくくくくく
うふむんまゝくくくくくくくくくくくく
多夢の病多しといふ

